

# 日本近代文学と中国古代文学

## ——中島敦の『李陵』を中心に

陳愛華

### はじめに

中島敦は、昭和十七年に「古譚」という題下の二つの短編『山月記』と『文字禍』で文壇に登場してまもなく、持病の喘息が悪化したため、三十四歳の若さであわただしく世を去ってしまい、その名を後世にとどめる名作『李陵』がようやく活字になったのは、彼の死後の昭和十八年七月のことであった。『漢書』『史記』『文選』などに多くの素材を得ているこの遺作『李陵』は、同じく中国古典に題材を求めた敦の作品『弟子』『名人伝』などを越え、発表されてすぐ敦の文学における最高峰という評を得た。ところが、『李陵』は正確に言えばまだ作品ではない。中島敦の文字通りの遺稿である『李陵』はもと「満身創痍の感のある」、清書を待つばかりの状態の未定稿であり、しかも無題の草稿であった。死にタイトルを確定する時間さえも奪われた短命の作家は、死の直前まで執着したこの最後の作品を通して、我々に伝えようとしたことは一体何であろうか。本稿では、『李陵』における人物像及び中島敦の漢文調を主な特徴とする文体を考察し、敦の『李陵』についての意図を考えてみたい。

### 一、『李陵』における人物像

『李陵』はこれまでの敦の文学の枠を超えた、という感はずその人物の設定からもうかがえる。これまでの敦は、一人の人物の生死を語ってきた。しかし、『李陵』では、同時に三人の人物のそれを追う。武将の李陵、文人の司馬遷、義士の蘇武、それぞれ強烈な個性を持つこれら史上に名高い三人の人物を、敦が古典の中から掘り出し、『李陵』で蘇生させる。これからは、小説の構成の順に沿って、この三人の人物像を見ていく。

第一章に登場する人物、漢の將軍李陵は、作品の核心の人物とも言えよう。李陵は、自ら乞うた北征の任務に、季節と距離に相当に難しい注文を加えられる。五千の歩卒を率い、匈奴勢力圏深くへ入って偵察を進める中、匈奴の騎馬の大軍と遭遇する。自分の六倍以上にあたる敵の大軍を目の前にしても交戦の前夜「雷のごとく鼾声を立てて熟睡した」という強将李陵は、しかし運に恵まれずいくつかの運命的くいちがいのかさなったため、困難な撤収作戦十数合の後、根拠地をあと数日の日程にして、軍中矢が尽きた。死闘してとう

とう数十人の部下と重囲を突破した李陵は、「麾下を失い全軍を失って、もはや天子に見ゆべき面目はない」と、ふたたび敵中に駆入った。すでに死を覚悟したと見える李陵は、そこで不意な一撃を受けて失神し、敵に生捕られた。番中に落ち、虜となった李陵は死して節を全うするか生きて功を得て帰るかを考え、後者を選んだ。この決定をした上、李陵は単于の首を狙おうとしたが、却って単于の気性にふれて素志を萎えさせた。それに今迄潔しとしなかった匈奴の世界を、「ここでは、強き者が辱められることはけっしてない」と、彼は新しい目で見始めた。それでも単于の漢に対する軍略の示教の請求に李陵は固く断った。しかし、思いがけない中傷により李陵は匈奴に軍略を授けたと誤解され、漢にいる老母妻子一族が誅殺された。これを知った李陵は憤激し、ついに単于の王女と結婚し、匈奴軍の軍事顧問となった。

しかし、これで李陵はとうとう匈奴に投降したというよりも、匈奴を選んだといったほうが適当と考える。漢の将軍として出征してから、匈奴の軍師となるにまで、李陵はずっと運命的なくいちがいの連続に翻弄されているようである。しかし運命は全く李陵にチャンスを与えなかったのではない。匈奴に投降した十数年後、漢に帰還する機会が訪れるが、李陵は帰ることを選ばなかった。ふたたびかつ最後の選択として、彼は匈奴の地を選んだ。胡地に残っても積極的な生があるわけではないが、彼は天の悪意に屈したくないのである。漢に帰還することは武帝への屈服を意味するからだ。こうして、運命への抗争でもあるかのように、李陵は最終に匈奴での生を選んだ。「丈夫再び辱める、能はず」とは、彼の漢に対する最後の一言である。「生きて虜囚の辱めを受けず」とする戦陣訓に反し、虜になった李陵は却ってはじめて自分が辱めを受けずに生きているのに気が付いた。同じく生のつたなさを耐えて生きていても、彼は自我を意識しての生しか選ばないのである。しかしこの点に対し、彼自身も匈奴の地に来るまでは意識していないようである。比べて見れば、小説の第一章における李陵像と第三章のそれとは、どこかが変わったように見える。第一章においては、李陵は闘うことだけが生きが이었다。武帝に無理な注文をされても、彼は何一つ疑いも不満もなく、ただ命じられた通りに闘うだけである。匈奴の大軍に敗れ、もはや刀折れ矢尽きたという状態になったときも、「全軍慙死の外、途は無いやうだ」とつぶやく李陵の中では闘う意志のほか何もないのである。脱出の苦闘で、すでに敵中から抜け出したが再び乱陣中に戻る李陵にも、死ぬまで闘おうという一念しかないのである。敵に背を見せることさえ拒絶する李陵のこの行為は、もはや冷静な軍略家のそれと言うよりも、ほとんど闘う機械の如きものである。長時間動き通しの機械が故障するように、李陵はとうとう「失神」して、ようやく闘いが止った。小説第三章に入り、失神した状態から目を覚ました李陵は変わった。今まで闘いの機械としてのみ生きてきた李陵に、心の動きが見え始めた。「ただ士を遇するために士を遇する」という単于を、李陵は男だと感じる。また単于の息子が自分に対する純粋な好意と尊敬にも、「ふと友情のような物をさえ感じる」

ことがあった。捕虜になって、はじめて人間としての李陵の像が浮かび上がってくる。それは匈奴が李陵を変えたのか、あるいは李陵の中に眠ったままの何かが目を覚ましたのか。ここでまず肯定できるのは、李陵はもはや漢の降将ではなく、漢と匈奴の間を生きている人間と言う事実である。彼の中にすでに漢と匈奴の両極が併立しており、その間で徘徊するのは、もしくは投降後の李陵の運命と言えよう。

ここまで李陵像を見てきて、ひとまずそれを一段落し、これに関わってくるほかの二人の人物を取り上げてみなければならない。まず第二章で登場する司馬遷を見たいと思う。李陵が降服したという知らせが漢に届いた時、その処置をめぐり、ほとんど全部の臣僚たちが李陵の変節を非難する中、当時、「眇たる一修史官にすぎない」司馬遷という男が、李陵の素性を信じてその弁護をした。武帝の憤怒と佞臣の誣告によって司馬遷の処刑が、李陵の家族よりも先に行われる。そのうえ男を男でなくする残酷な宮刑であった。しかし彼が宮刑に遭うにあたって、「別に驚く者はない」。なぜなら司馬遷は「たかだか強情我慢の偏窟人としてしか知られていなかった」からである。受刑した司馬遷は、闇黒の世界に落ち込んでしまった。しかし、彼は自省的である。天の悪意を怨んだが、彼は一切外界のせいとすることをよしとしなかった。「動機がどうあろうと、このような結果を招くものは、結局『悪かった』といわなければならぬ」。しかし彼はまた「どこが悪かった？ 己のどこが？ どこも悪くなかった。己は正しいことしかしなかった。」とそれを否定する。問いの繰り返しの果て、「強いていえば、ただ、『我あり』という事実だけが悪かったのである。と彼は帰結する。狂乱と憤懣との中で、たえず死への誘惑を感じたが、彼は死ねなかった。彼にはまだ父の遺命の修史の事業があり、それが彼を死への誘惑から阻んだのである。彼はその事業のために生きると決めた。ただ、「一個の丈夫たる太史令司馬遷は天漢三天の春に死んだ、そして、その後、彼の書残した史をつづける者は、知覚も意識もない一つの書写機械にすぎぬ――自らそう思い込む以外に途はなかった」。司馬遷は、残された「書写機械」という唯一の生き方で「凄惨な努力」を続けているうち、「生きることの歓びを失い尽くしたのちもなお表現することの歓びだけは生残りうるものだ」と考えるようになった。彼は「書中の人物としてのみ生きていた」。

小説の三人物の比重から言えば、最も軽く扱われるように見えるのは蘇武である。この人物についての描写は、ほとんど李陵の目を通して行われている。作者は、蘇武を一人の独立した人物として描いたのではなく、李陵の対照として設置しただけと見える。李陵は匈奴で虜になった時、その旧友、漢の使節として匈奴に至った蘇武は、すでに降服を肯んじないため北海（バイカル湖）辺に羊を牧して幽閉の生活を送っていた。李陵は単に降服の説得を依頼され、蘇武に会いに行った時、その生活の苦しさ驚いた。苦節して、「こうした惨憺たる日々を堪え忍ぶ」より、なぜ自殺しなかったのかとさえ思ったほど、蘇武

は何を目当てに生きているのかを怪しんだ。蘇武の生きることも、運命への抗争に見えるが、実際に彼を支えているのは運命に対する意地や性格上のやせ我慢ではなく、「譬えようもなく清冽な純粋な漢の国土への愛情」、しかも「義とか節とか外から押し付けられたもの」ではなく、「常に湧き出る最も親身な自然な愛情」である。こういう蘇武は、小説の中で最も単純な、かつ理想的な人物として描きあげられている。

李陵、司馬遷、蘇武の登場人物三人とも、運命の悲惨さを語るにふさわしい典型の例である。そして三人とも、運命の悪意に屈することなく、一生をかけて戦うのである。もし単に三人の人間と運命に着目するだけならば、以上の点においてしか三人像の共通する意味は見出せないかもしれないが、しかしそれだけで作者の創作意図を推測しては恐らく見当はずれになると思う。描かれた三人像において、まだ特別に注目すべき所があるのである。一つはその人物たちの生死の舞台——漢と匈奴の二つの世界。もう一つは司馬遷の修史の事業。この二つについては、のちほど一歩進んで作者の意図を探究するに際して、また取り出して詳述することにしたい。

## 二、『李陵』の文体

中島敦の文章には文壇の「合い言葉」や「術語」がほとんど見えなく、その文学は、「様々な文学流派から超然とした、『読むに耐える』文章からなる古典」とする評論がある（『中島敦と問い』小沢秋広 河出書房新社1995年刊）。『李陵』にも、敦の特有の風格を持つ文体が見られる。先ずその冒頭部分を参考に見てみたいと思う。

漢の武帝の天漢二年秋九月騎都尉 李陵は歩卒五千を率い、<sup>てんさいしりやうばう</sup> 辺塞遮虜障<sup>を</sup>を発して北へ向かった。<sup>アル泰山</sup> 阿爾泰山脈の東南端が戈壁砂漠に没せんとする<sup>てん</sup> 辺の礪磧<sup>を</sup>たる丘陵地帯を縫って北行すること三十日。<sup>朔風</sup> 朔風は戎衣を吹いて寒く、いかにも万里孤軍来たるの感が深い。<sup>漢</sup> 漢北・<sup>しやうきざん</sup> 凌稽山の麓に至って軍はようやく止營した。すでに敵<sup>きうど</sup> 匈奴の勢力圏に深く進み入っているのである。秋とは言っても北地のこととて、<sup>うもく</sup> 苜蓿も枯れ、<sup>しん</sup> 榆や木<sup>かきやう</sup> 聖柳の葉ももはや落ち尽くしている。木の葉どころか、木そのものさえ（宿営地の近傍を除いては）、容易に見つからないほどの、ただ砂と岩と<sup>かいら</sup> 磧と、水のない河床との荒涼たる風景であった。極目人煙を見ず、まれに訪れるものとは広野に水を求めるぐらいのものであった。<sup>とつこつ</sup> 突兀と秋空を<sup>とる</sup> 劃る遠山の上を高く雁の列が南へ急ぐのを見ても、しかし、将卒一同誰一人として甘い懷郷の情などに<sup>あは</sup> 唆られるものはない。それほどに、彼らの位置は危険極まるものだったのである。

小説のこの冒頭部分にすでに見られるように、いわゆる漢文調と呼ばれている張り詰めた調子の、強度のある文体は、その運用の自由度と円熟度によれば、まるで生れつきのもの

のようである。もともと敦にとって、「漢字の教養はその生れながら自然と身についた芸のようなものであった」(『中村光夫全集5』『青春と教養—中島敦について』昭和47年筑摩書房)。この冒頭部分に限って言っても、高橋英夫氏が評したように、「この文体とこの大風景の距離は技術的に零であり、この文体と武将の内面との間にも距離は介在していない」(『中島敦論—運命と人間』昭和47年『新潮』)。この文体は、敦の表現したいものと渾然一体とも言えよう。換言すれば、この文体自体も敦の表現したいことと言ってよいと思う。一方、敦を明治以降に現れた極く少数の文章家の一人と評する吉田健一氏はこう言う。「中島が優れた文体で自分が考えるままのことを、或いはその文体で得た言葉に教えられて考える通りのことを表わすという世界のどこでも文章家に認められる性質を身に付けていた」(吉田健一全集補巻『中島敦研究』『光と風と夢』)。敦はその文体を運用するだけでなく、文体から教えられているというのは、言えるのだろうか。もしそれを事実と認めれば、普通論じられている「臆病の自尊心」、「存在の不確かさ」とはまったく異なった、新たな敦像が見出されるだろう。その「漢文調」の文体から教えられたもの或いはその文体がすでに意味しているものと言え、まず思い当たるのは、漢字である。漢字はそれを使いこなしたと言える中島敦にとってどういう意味を持つかは興味深い問題だと思う。敦の文壇デビュー作の一つとして、『文字禍』と言う短編の中でも、「文字霊」を誹謗して王の怒りを買った博士が、粘土版の文字たちが頭に落ちかかることによって処刑されるという結末を迎える。敦はここで、文字は権力の象徴であることをほのめかしたかったのではないか。特に漢字という中国の長い歴史の中で政治と権力と深い関わりを持ちつづけてきて、充分に発達したとも言える「表意文字」の性質を考えるならば漢字と権力のつながりは一層明瞭となろう。ここでまた小説の冒頭部分を振り返ってみたいと思う。そこで感じたのは、文体の張り詰めた調子で作り出された、一種の緊張感である。その緊張感は、言うまでもなく漢と匈奴の両軍対峙から来ている。もっと正確に言えば、対峙する二つの世界から来ているのである。漢という「文字」によって支えられた世界と、それに対抗する「文字」のない世界——匈奴。『李陵』で描かれた「漢」と「匈奴」との戦闘は、即ち文字文化社会と無文字文化社会との対抗である。李陵が生きたのも、風土、慣習の違った漢と匈奴ではなく、文字の有無によって対立する二つの社会である。この二つの社会の対立は、『李陵』において単なる背景ではなく、李陵、司馬遷、蘇武の三人の人物像よりも大きな意味を持つかもしれない。

### 三、作者の意図

この部分では、作者中島敦の創作の意図に迫っていきたいと思う。『李陵』が執筆されたのは太平洋戦争の初期であったため、「生きて虜囚の辱めを受けず」という戦陣訓に対する疑惑などの戦争に関する思考が敦の創作の意図だと言われているが、それは不当だと思われる。敦が『李陵』と出会ったのは、いうまでもなく、戦時の時局の影響があると考え

るが、その前からずっと『名人伝』『古俗』『弟子』などのいわゆる「中国もの」を書き続けてきた敦にとって、『李陵』執筆は必ずしも偶然な出来事ではない。『李陵』に託された敦の「常なる」ものは、その文体から見たように、文字及び文字社会についての考えに基づいたものだと考える。このような考えを、敦はその人物像に最も多く託しているのである。

人物三人の中、司馬遷はもっとも文字と関わりの深い人物である。「渺たる一文筆の吏にすぎない」が、「文字」を操って「歴史」を書くということによってある意味で絶対的な「権力」を手に入れているとも言える。この点について敦は次のようにはっきり語っている。「太史令という職が地味な特殊な技能を要するものだったために、官界につきものの朋党比周の擠陥讒誣による地位(或いは生命)の不安定からも免れることができた」。ここから司馬遷が宮刑に遭った原因も窺われる。修史という事業が、司馬遷に文字による権力を与えたゆえ、「理解ある文教の保護者」という、文字の力の恐しさを熟知している武帝も、あえて彼の命まで奪おうとはしなかった。ただし、武帝には司馬遷の「我あり」というところは恐しかったのである。いくら「文字」を操縦していると言っても、それに縛わる「権力性」を分かていなければ、あるいはその権力を使おうとさえしなければ、司馬遷はまだ一小吏としての安穩なる暮らしを送っていたかもしれない。彼が群臣の前に出て李陵の弁護をしたのは悪かった。正に自分の握っている「文字」の権力を誇示するような「あまりにも不遜」なことで武帝には見えた。司馬遷に与えられた宮刑とは、警告のようだが、致命的であった。それにより、「一個の丈夫たる司馬遷」が死んで、残ったのはただ「知覚も意識もない一つの書写機械」であった。司馬遷は「自らそう思い込む以外に途はなかった」。「修史の仕事は必ず続けられねばならぬ。これは彼にとって絶対であった」。「歴史」こそ、「文字」であり、権力である。男としての最大の辱めを受けてもなお彼が修史の事業を続けたのは、こうした「文字」による権力を放棄すれば、もはや彼の恥を雪ぐ道はないと考えたからである。

一生を「文字」に憑依する司馬遷と違って、李陵はもとより「文字」と縁遠い一武将である。しかし、李陵も漢という文字の発達した社会で生まれ育った人間である。ただそういう性質は、彼が匈奴の世界と出会うまで容易に気づかれなかった。漢から離れ、匈奴に入ることは、彼がこうした自身の性質を認識するきっかけとなる。匈奴で虜となった直後の李陵は、まだ漢的思考を保持したままである。彼の匈奴から脱走する計画が果せなかったのは、正にそのせいである。彼はこう考えた、「仮令、單于を討果したとしても、その首をもって脱出することは、非常な機会に恵まれない限り、先ず不可能であった。胡地にあって單于と刺違えたのでは、匈奴は己の不名誉を有耶無耶の中に葬ってしまうこと必定故、恐らく漢に聞こえることはあるまい」。彼は行動する前に先ず「漢に聞こえる」ことを意識するのである。それは匈奴に来てから意識し始めたのではなく、漢の將軍であった時の戦いの機械のような李陵の中に、すでにこういう意識が潜在したと思われる。そもそも

李陵は漢軍を率いて匈奴軍と最後の死闘をした時、ふたたび戦陣の中へ戻る李陵はその必死の決意を得たのは、「逃れ去った部下の数を数えて、確かに百に余ることを確かめ」たうえのことである。漢のために命さえ惜しまずと見えた李陵は、やはり「漢に聞こえる」ことを先に確認しなければならないのである。なぜ「漢に聞こえる」ことが大事なのか。「漢に聞こえる」こととは、歴史に記載されることである。武人である李陵さえも、文字の力を信じ切っていた。文字社会の中を生存する人間でさえあれば、李陵であれ、司馬遷であれ、その絶対的な束縛力から逃れようはない。たとえ文字社会を離れ、無文字社会に至ったとしても、容易に文字社会の翳りを擺脫することはできないのである。まさに李陵はその典型である。文字社会のモラルを持ったまま無文字社会に来たところで一幾分李陵の中のどこかに変化が起こったように見えるが—到底彼は完全に無文字社会の中に溶け込むことはできなかった。時間とともに匈奴の世界に馴れていく李陵にはまた蘇武との再会が準備された。それはまさに李陵にもう一度漢という世界を突きつけ、その最終の意向を確認させることである。結局、蘇武の降服勧告を依頼され、訪れに行った李陵は口を切らなかった。「蘇武をも自分をも辱めるにはあたらないと思ったからである」。そう思った李陵は決して蘇武の心を理解した人間に変貌したのではない。ただ匈奴の世界の中に完全に溶解し、蘇武を説得しようとする人間にはなれなかった。李陵は再び匈奴の世界を選んだにもかかわらず、結局匈奴の世界にも入れないまま、漢と匈奴の間を生き続けるにほかならないのである。もし『李陵』を李陵の悲運を語った歴史小説とすれば、運命に翻弄されることよりもこの結末こそには李陵の最大の悲劇があると言えよう。また、李陵が最終に匈奴を選んだということから窺う作者の意図は、ほとんど李陵の見た通り、文字社会の漢がいう「礼儀」などは「醜いことを表面だけ美しく飾り立てる虚飾」にしか過ぎない、「煩瑣な礼のための礼」や「美名の影に隠れた漢人の陰險さ」より、「胡俗の粗野な正直さ」のほうが「はるかに好ましい」。作者敦は、李陵にこうした選択をさせたのは、自分自身も無文字社会に惹かれていたからと思われる。

## 結び

以上の考察により、次のようなことが分かる。

『李陵』において、中島敦は以前の「中国もの」と呼ばれた作品を書くのと同様に、史上に実在した人物が生きた波乱な人生を中心に物語を展開させている。勇猛な武将でありながら、誤報により、売国奴とされ、異国の地に骨を埋める李陵。恥辱的な宮刑をされても、自らを「書写機械」としてまで、修史に懸命する司馬遷。酷寒のバイカル湖辺で苦節十九年、ようやく漢に迎えらる蘇武。しかし、これら悲運の人物の実人生を取り上げて、敦が描こうとしたのは、ただ「運命」、「無常」などといった曖昧な図式ではなかったと思う。

李陵も司馬遷も悲劇性に満ちた人生を生きたが、その悲劇の原因を求めれば、ある意味では、彼ら自身の文字社会の人間である性格に帰結できる。李陵は「漢に聞える」と言う文字社会の人間の特有する考えを擺脫できなかったゆえ、文字社会と無文字社会の間を生きるしかないという結末に至った、司馬遷は李陵の弁護をしたのも、李陵一身の弁をするより、歴史の真実、あるいは文字の権力を維持したいという一念に駆使されたのと言えよう。

同じ悲運に遭遇しても最後に円満な結末を迎える蘇武は、李陵と司馬遷と異なって、その文字社会の出身にもかかわらず、文字に憑かれて人間ではなかった。敦が蘇武を李陵の対照として設置したのも、節を屈した降将と苦節した義士を対照させるだけではなく、李陵の持つ文字社会の人間の性格を照射するために、蘇武という理想の人物を作品の中に持ち込んだのと思える。蘇武には、「義とか節とか」文字社会から「押し付けられたもの」ではなく、「常に湧き出るもっとも親身な自然な愛情」に支えられて生きているという、人間の本来のあるべき人間性が強調される。そこに、作者の好悪が明らかに表明されていると思われる。文字社会と無文字社会の両者について、敦はあくまでも後者を好んだのである。

中島敦自身には、文字社会と無文字社会の差違を体験したことがある。戦時日本支配下の南洋群島（ミクロネシア）で、国語教科書編修書記として、彼は一年近く勤務していた。「父祖伝来の儒家」に育ち、自身も漢学に最も親しんだ敦に、南洋群島という無文字社会との出会いは無論大きな事件であった。しかも、彼はその「無文字」の社会に「文字」をもたらす使命を抱いてその地に渡ったのである。そのことは彼にいかに大きな刺激を与えたのかが想像できよう。しかし、彼の南洋で取材した作品や日記から見ると、その「文字」をもたらす任務より、彼はずっと南洋の無文字文化の世界の居心地良さを伝えることに勤めたと言える。

南洋勤務から帰ってから、中島敦は文学創作に励んだ。『弟子』、『名人伝』『李陵』などのいわゆる「中国もの」はほとんどこの時期に創作されたのである。これらの作品を創作する間に文字と文字社会についての彼の思考は絶えなかったと推測できる。彼は文字を操りながらも、その権力に頼ろうとしなかった。かれは『李陵』において、無文字社会での生を選んだ李陵をあくまでも主人公とし、文字に一生をかける司馬遷を脇役としたことも彼の文字に憑依しないという意志を示していたのであろう。それに、司馬遷の口を借りて、彼は自分の文学創作の方針を語った。「述べて作らず」、それは彼が中国古典の原典に忠実な作品を次々と書き上げた理由でもあろう。



文字に憑依しないことは、彼の生まれつきの漢学、漢文の素養と矛盾するようでいて、実はそうではない。川村湊氏が評したように（『無文字社会の誘い—中島敦とくアジア』的なもの）『昭和作家のクロトボス・中島敦』所収）、「もっとも『文字』に大きな希望を持つものこそ、それに対しての懷疑も絶望も深いといわざるを得ないのだ。『文学』を深く信じるのが、また『文学』を深く否定することにつながっていくように」。『李陵』は、まさにこのような、敦の文字観、あるいはその文学観を暗示しているのであろう。

#### 参考文献

小沢秋広 『中島敦と問い』 1995年 河出書房新社

勝又 浩、木村一信編 『昭和作家のクロノトボス・中島敦』 1992年 双文社

奥野正元 『中島敦論考』 昭和60年 桜楓社

中村光夫、氷上英広、郡司勝義編 『中島敦研究』 昭和53年 筑摩書房

佐々木充 『中島敦』 昭和43年 桜楓社